

石仏調査ニュース ちがさきの石仏

第9号

発行 茅ヶ崎市教育委員会
茅ヶ崎市文化資料館
編集協力 文化資料館と活動する会
(民俗行事部会)
連絡先 〒253-0055
茅ヶ崎市中海岸 2-2-18
TEL:0467-85-1733
shiryokan@city.chigasaki.kanagawa.ne.jp



西運寺(南湖)の地蔵菩薩

金子 栄司

西運寺は南郷力丸の名を冠した石仏や義経の霊を祀った御霊神社があることで知られている。

『新編相模国風土記稿』に「御霊山浄祥院と號す、浄土宗 赤羽根村西光寺末 本尊阿弥陀仏を置く、慶長元年(一二四九)僧念譽草創して一寺とす 慶長十四年(一二六二)四月十七日寂す、もとは庵室なり」とある。また「御霊社義経の霊を祀る、木像を神体とす、西運寺持」とも記されている。

御霊神社は寺の南隣にある。西を向いた本堂に向かって山門を入るとすぐ右側が墓地の入り口で、そのあたりに何体かの地蔵菩薩が祀ら

れている。

寺院の北側はJRの線路に接していて、西側には民家が迫っており、地蔵菩薩の居られる辺りが窮屈になるのも止むを得ないことではあるが、ちよつと気の毒にも感じられる。

この地蔵菩薩の御顔、下ぶくれ気味で笑みを含んでいて、ふくよかである。手狭なことなどいささかも気にされた様子はない。口の造りは小さ目で、受け口のようにも見えるが、詣でる人々に語りかけているような唇の動きが感じられるのである。向かい合っている癒される。地蔵菩薩は釈迦入滅の後、弥勒菩薩が次の仏になるまでの間、無仏の世にあつて多くの人々の苦しみや悩みを救ってくれる菩薩である。生きとし生けるものが苦しみを六つの生死のくり返しの世界、六道輪廻の苦しみをやわらげ、救って下さるのが地蔵菩薩なのです。



(写真) 西運寺の地蔵菩薩

南湖の馬頭観音

金子 栄司

観音信仰の普及とともに、聖観音と変化した観音が信仰されるようになった。六観音・二十五観音・三十三観音・四十観音などである。

天台宗では、十一面観音・千手観音・不空羂索観音・馬頭観音・如意輪観音・聖観音を六観音とし、真言宗では、不空羂索観音を准胝観音と入れ替えている。

観音経は身の安全を守る持経にされ、広く誦された。札所めぐりの流行も伝播して、坂

東・秩父等に三十三所の観音霊場がつけられた。江戸時代には、観音は有力な現世利益神としてさかんな信仰をあつめ、馬頭観音は馬の守護神とされた。以上は、『日本宗教事典』の観音信仰の記述の一部を抜書きしたものであるが、これを踏まえて南湖一丁目の「馬頭観音塔」について記述してみたい。



(銘文)

こほし
 為悦衆生故
 ●馬頭觀世音菩薩
 現無量神力
 こほしや
 一 為悦衆生故 現無量神力は『法華經』「如

来神力品」第二十一の偈の一節である。「衆生を悦ばしめんがための故に、無量の神力を現したもう(たまえ)」と読み下す。民俗行事部会の木下氏に教えていただいた。

二 右左に書き分けてある「くずし字」は、「こほし こほしや」と読める。「ほ」は「本」の古語。「恋し 恋しや」と刻んだものもある。

三 「●」は三つの文字で構成されているようである。中央に「妙」、その下は「一」、左右に分かれて偏と旁(つくり)のようになっているのは、「以」の字に似ている。石塔の銘では種子の位置にあたる。「妙」の文字から「妙法華經」が思い浮かび日蓮宗を連想する。法華經の唯一絶対とその功德を造形したように思える。

「衆生を悦ばしめんがため・・・」「恋し 恋しや」の文言は供養塔の中でも珍しい。願主・施主の情愛が伝わり亡き人の供養のようである。

馬頭観音は、道祖神と同じように路傍に祀つ

て、馬の病氣と安全を祈る馬の守護神のように受け止められている。市内五十七基の大半もこの信仰のよるものであるが、生きとし生けるものを慈悲深く思う気持ちの強い観音菩薩は、人間だけでなくあらゆる生物を救済する。中でも馬頭観音は強くその思いを持っていて、衆生の迷いや煩惱をことごとく取り除いてくれると信じられている。

馬頭観音を路傍に祀って亡き人を供養した例は、赤羽根の明治十四(一八八二)年の銘のものがある。この塔も日蓮宗との関係が知られている。

参考文献・『広辞苑』岩波書店。『日本宗教事典』講談社学術文庫。『観音像の形と物語』大法輪閣。『図説・仏像の見分け方』大法輪閣。

圓藏山王社の新石仏と岐路の道祖神の移設

塩原 富男

歩いて、見て、確かめる。私は、石仏を見て歩くときの基本にしてみました。

体調を崩し、歩くことが少なくなっています。が、小正月のころ自転車散歩で赤羽根を回って

みました。宝積寺の南から西の西光寺にかけての耕地整理の工事はほぼ終り、目下道路整備工事が行なわれていました。ところで宝積寺の東隣の旧名主小沢家を取り壊され、門だけを残して周囲の樹木が伐られ、ブルドーザーが動いていて驚きました。

さて本題ですが、これも歩かざるうちの変化です。昨冬十一月十日付の「タウンニュース」に、円蔵の神明大神の摂社である山王社の記事が出ていたので、このついでに訪ねてみました。

驚きました。社殿が新造され、境内を玉垣で囲み、既存の層塔に加えて社前に賽銭箱、狛犬ならぬ日吉の神の使いとされる神猿像、石燈籠、社誌の碑、手水鉢、新設の鳥居は山王形です。社殿の左手には、これまた山王の本地比叡山の日吉大社の遥拝の碑と、まさに面目一新、これらがすべて石造です。さらには、鳥居前の入口左には社号碑が建ち、その前の路傍に、かつて同社の道を隔てた東の角の辻にあった双体道祖神が、並んで建っていた句碑とともに移設されています。これまでに完璧な形に整備されたのを見ると、地域の人々の御尽力もさることながら、伝統の信仰の在り方をしみじみと思わざるを得ませんでした。

この石造物についての詳しくは他にゆずりますが、新造の神猿像について、社誌によりますと、東京は千代田区永田町所在の旧官幣大社日枝神社のものを同社の許可を得て模造したとか。女猿は小猿を抱いた子育ての珍しい像です。石造の山王鳥居も市内では初めてかと思えます。「タウンニュース」によれば、この事業の竣工式は十一月五日です。

移設された道祖神は、旧位置の方が草花などが植わっていたりして風情があつたように思いますが、新しく守られていることは嬉しいことです。

「春や春 岐路に立てども 和合神」の句碑は、故人の郷土史家「あしかび」こと鶴田栄太郎の一句で、昭和二十七年、横浜在住の俳人の飯田九一を招いて大山みちの吟行の際に詠まれたものとか。松林の長福寺に記念の九一の句碑があり、その句碑の背面に同行者の句が刻まれている、その中にこの句もあります。書は鶴田夫人の桃世で、茅ヶ崎郷土会が昭和五十四年に建立したものです。

(文中敬称略)

萩園の東と呼ばれた旧家と石仏

金子 栄司

(調査地) 萩園一六六〇 石井輝氏宅

(調査日) 平成十八年、平成十九年二月十日

(調査対象石仏) 供養塔、板碑、他に道祖神幟(調査者) 金子栄司、池田卓郎(文化資料館)

萩園地区の石仏を調査していたら、屋敷の中に石仏があるので見てほしいと声を掛けられて調査に伺った。光背形の石仏であつた。「諸精霊一切供養」の文字があり供養塔と判明した。新発見の供養塔であるが、造立願主や祈願に関するの手掛かりはない。供養の文言に触されたかのようにご当主が不思議な体験を話された。心霊的な内容に興味をそそられ、聞き終わってから記録してなかったことを悔いていた。再びご当主と、そのお父さんの話を聞くことができましたので、脈絡を整えず書き残しておく。ご当主五十歳後半、お父さんは八十歳、若々しく大変お元気である。

ご当主が二十五歳の頃(一九八〇年頃)、消防団の集会在九時ごろ終わり自宅に戻ってきた。我慢していた小用を足すため庭の奥へ向か

って行くと、一人の武士が現れて、「これより中へ近寄るな(来るな)」と制止された。武士は鎧を着けていて、身体に矢が刺さっている。兜は着けていない。その姿は、源平合戦絵巻の武士の姿で大鎧姿の頼朝や義経に見る姿だった。ご当主は言われるまま立ち止まっていると、いつのまにか武士の姿は消えていた。

この後日談。近所にお住まいの、ご当主の妹さんがまったく同じ姿の武士に出会っている。先の話のおよそ十年ほど後のことだという。

かつて庭の北側には竹林と七本の大ケヤキがあった。そのケヤキの根元から刀二振りと刀の鏝が出てきた。刀と鏝のその後の行方はわからない。

現住居の裏、敷地の北東の隅に一坪(三、三㎡)ほどの土盛の塚がある。もっと高かったらしいが五十〜六十cmほどの高さの、崩れを防ぐ玉石が周りを囲んでいる。塚には先述の供養塔の左に五輪塔、右側に板碑が祀っている。光背形の供養塔には一面二臂で左手に未開敷の蓮華を持つ立像が半肉彫してある。光背の頂部が部分欠落しているが、「サ」の左半分と読める種子が残っている。半肉彫像の頭部、額(ひたい)から上が縦長に造ってある。宝髻(ほうきつ)と呼ばれる髪型と宝冠または華冠というか

んむりを載せ、このかんむりに化仏としての阿弥陀仏を現しているような形にしている。種子の「サ」は聖(正)観音菩薩、また未開敷の蓮を持つのも聖観音菩薩の特徴をあらわしている。

像に向かって右側に、「□□諸精霊一切供養」像の左側には「宝曆六丙子二月十七日」と刻んである。観音菩薩に精霊供養を祈念し造立したもの。

この供養塔を建立した二月十七日に菩提寺の住職に供養を願ったが「怖い」といって、来てくれなかったそうだ。

右側の板碑は青緑色の堆積岩で、頭部は三角形をしている。板碑特有の二条の切り込みはない。高さ四十cmほどの碑面の下側は土に差込むためのくびれがある。碑面中心より下方に蓮台彫りこみが薄く見える。それ以外の表面は、鋸で挽いたような一〜二cm幅で浅く凹凸した斜線が幾筋も走り銘文は発見できない。二条線・梵字・凶像・紀年銘など板碑にある銘文部分が剥離した可能性もある。板碑の全容は横浜市立歴史博物館に展示してある「山の上遺跡」出土板碑(文末写真参照)とそっくりで、板碑の特徴を幾つも持ち合わせている。銘文が読めないのが残念である。旧宅(立て替える前の家)の

入口の左右に門柱のようになっていたモチの木

の根元から出土している。
このお宅は、檀家寺の過去帳によると当主で十五代目になる。萩園の最も東に位置している。お父さんが若かったころ、屋敷の前の道をそのまま東へ向かうとすぐ墓地で、その先は田畑だった。墓地手前の道路を整備したとき土中から五輪塔が幾つも掘り出された。前述の塚や道祖神を祀った場所に並べてある。

敷地の東側角を北上する道は西久保へ通じる道であり、この家の先に民家はなかった。敷地の北側を守った屋敷林は七本の大ケヤキと竹林、南側は道路に沿ってサンゴジュの生垣が連なる。ここにも二本の大ケヤキがあった。サンゴジュは成長が早く、葉は燃えにくく強風に耐える。生垣や防風林としてよく植えられた。しかし、生垣の剪定には一日かかった。北側のケヤキと竹林、南側はサンゴジュの生垣。典型的な屋敷構えになっていた。萩園の集落や西久保集落からも、小山か鎮守の森のように見えた九本のケヤキは太平洋戦争の時、献木として国に捧げた。

敷地の南東の角はへこませて囲い、嘉永元年銘の基台付き角柱文字道祖神ともう一つの石仏を祀っている。道祖神の基台の水平な部分の

全面に大小のクボミが沢山つけられている。ご当主のお父さんに聞くと、子供のころ、よくトリモチで遊んでいたという。門柱のようだったモチの木を剥いで、道祖神の基台に作ったクボミに入れ、握りやすくして先の少し丸まった石でトントン搗いてトリモチを作った。搗くほどに石の先とクボミが丸くなじんでくる。搗く回数が多いほど良いトリモチができた。子供たちは自分専用のクボミをこしらえてトリモチ作りを競った。獲物は家のまわりに沢山いた。特にメジロをとった。「外に遊びがなかった」からトリモチでよく遊んだものだという。道祖神にクボミを付けても大人から叱られた記憶はない。この家は萩園の道祖神とか東の道祖神とも呼ばれている。萩園の道祖神は五基あるが、ご当主の道祖神のほかの四基はすべて八王子街道沿いの西側にある。

毎年一月十四日には三十軒ほどで道祖神祭りを行う。宿は九軒、順送りで行っている。江戸時代からの幟やおヒョウグが引き継がれている。道祖神の近くでは周りが舗装されている。燃やすことができなくなった。道祖神の場所に幟を建て、東側の空いている畑でドンド焼き祭りをやっている。各家からの寄付で一人三百円ほどの菓子を用意して、参加した子供に配る。

とても喜んでくれる。西久保の方からも参加する子供たちもいる。百人ほどの子供で一杯になる。道祖神と墨書したおヒョウグと幟は山宮藤吉氏の書。当家が保管している幟の収納箱の蓋裏に「大正九年 山宮藤吉書」と墨書してある。箱の中には天保の幟(風呂敷に作ってある)、大正九年、平成と、三代の幟が収められている。現在、ビニールハウスが建っている場所が、

旧宅があった所である。その前庭にあった井戸は、現在もビニールハウスの中にある。現役の井戸である。井戸枠は石を組み上げた構造になっている。関東大震災で石組がゆがんではいるが珍しい構造の井戸である。かつて黒鍬と呼ばれた石工(積み石屋)がいた。畑や屋敷の石垣、石井戸などの石を積んだりした。県内では湯河原や津久井にいた。黒鍬の字義は、戦国時代では築城や道路作りなどに従事した者。江戸時代は江戸城内の警備や掃除、荷物の運搬などに従事した者をいう。黒鍬者ともいった。

ビニールハウスの西隣は、西南戦役で戦死した加藤勝五郎さんの家があった地所。跡を継ぐ人がないので買い取った。お墓も引き継いだので戦没遺族第一号になっている。加藤さんの墓はこの東側の墓地にある。慰霊碑は三島神社の境内にある。



板碑(横浜市歴史博物館蔵)

市内の石造物(石仏)から

加藤 幸一

市内の石仏は、今までに多くの方々による調査が進められてきた。関連書は次のようにある。

・『茅ヶ崎市文化財資料集 第五集』茅ヶ崎市教育委員会、昭和四十四年

・茅ヶ崎市文化資料館編『資料館叢書一 茅ヶ崎の道祖神』茅ヶ崎市教育委員会、昭和五十年

・茅ヶ崎市文化資料館編『資料館叢書三 茅ヶ崎の庚申塔』茅ヶ崎市教育委員会、昭和五十二年

・『茅ヶ崎市史3 考古・民俗編』茅ヶ崎市、

昭和五十五年

・樋田豊宏編著『茅ヶ崎の道祖神』昭和五十一年

・郷土史学習グループ ピエーデ・クルーボ編『小出の石仏』茅ヶ崎市教育委員会、平成九年

・茅ヶ崎市文化資料館編『文化資料館特別展解説パンフレット 路傍の石仏・鶴嶺地区』平成十二年

これらの調査をもとに、文化資料館では民俗資料整理グループと協力して、平成八年十一月から再度調査を始め、平成十三年は鶴嶺地区の石仏、同十四年は茅ヶ崎地区の石仏、同十六年は松林地区の石仏、同十八年は小出地区の石仏の再調査を行い、各年度の『文化資料館調査研究報告』(茅ヶ崎市教育委員会)に掲載した。

調査対象の石造物は、江戸時代以降のものとし個人の墓石は除外した。その種類は百三十余、その数は千二十九基(体)となった。数の多い順から列挙すると、道祖神百十二基、地藏菩薩百八体、石燈籠九十八基、庚申塔八十九基、手洗石六十一基、馬頭観音五十七基、鳥居四十二基、観音菩薩二十九基、弘法大師二十九基、狛犬二十七基、題目塔二十六基、六地藏二十五体、廻国塔十基、念仏供養塔十基、八大龍王八基、

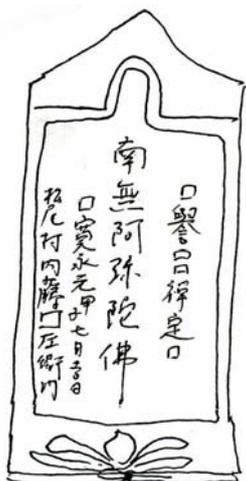
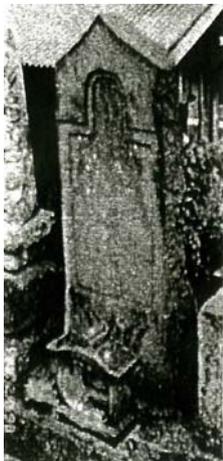
巡拝塔七基、二十三夜塔七基、万霊塔七基、(以下略)となる。

古いもの、新しいもの、珍しいもの、大きさや形、石に刻まれた文字など様々である。

その中で、今回は古い石造物について紹介していく。

一、念仏供養塔

念仏供養塔は浄土宗の寺院に多く見ることが出来る。市内には十基あるうち、下町屋・梅雲寺の供養塔は寛永元年(一六二四)江戸初期のもので、市内の石造物の中で一番古いものである。



(供養塔・寛永元年)

南湖・西運寺(浄土宗)の南側に御霊神社がある。その前に明暦元年(一六五五)の市内で二番に古い供養塔がある。西運寺に係するものである。



(供養塔・明暦元年)

二、庚申塔

市内には八十九基の庚申塔がある。江戸時代に造立されたものは七十四基で、江戸時代に造立されたものが多く残っている。

最も古いものは、円蔵・輪光寺にある寛永十七年(一六四〇)造立の塔で、浜之郷・龍前院の明暦三年(一六五七)造立の塔、矢畑本社宮の明暦二年(一六五六)の塔は三猿の出現期のもので、いずれも市の重要文化財に指定されています。

(龍前院・庚申塔)



(輪光寺・庚申塔)



平成十八年二月、神奈川県教育委員会は有形民俗文化財として市内の甘沼・八幡大神の承応三年(一六五四)造立の塔、行谷・金山神社の承応四年(一六五五)造立の塔、十間坂・神明宮の明暦四年(一六五八)造立の塔を県指定の有形民俗文化財に指定した。なお四臂(よんび)青面金剛像と二猿を刻んだ庚申塔は、青面金剛が庚申塔に現れる初期のものとして全国的に有名であるといわれている。当市のほか寒川町一件、平塚市二件、藤沢市一件も県文化財に指定された。

(本社宮・庚申塔)



(十間坂・神明宮)



(行谷・金山神社)



(甘沼・八幡大神)



三、地蔵菩薩

市内には百八体の地蔵菩薩がある。そのうち江戸時代のもものが四十四体、明治・大正期のもものは明治初年の廃仏毀釈のためか残っていない。また、昭和から平成にかけて十七体が造立されている。

下町屋梅雲寺に慶安四年(一六五二)造立の市内で一番古い地蔵菩薩がある。三百五十年余の年月を感じさせない、造立当時の姿を残している。



(梅雲寺の地蔵尊)

萩園満福寺にある地蔵尊像は、寛文六年(一六六二)造立のもので、梅雲寺にある像に次いで古く、こちらも造立当時の姿を見ることが出来る。

四、道祖神

市内にある百十二基の道祖神の中で、最も古いものは芹沢の細谷のもので、享保二年(一七一七)の銘を持つ単身像である。市内に単身像は八体あり、双体像は四十四体ある。双体像は江戸時代に作られた古いものに多い。また、双体像の中で最も古いものには、香川の路傍にある明和二年(一七六五)造立と思われる像がある。



(芹沢・道祖神)



(香川・道祖神)



(香川・道祖神)

幕末から明治以降は、文字で「道祖神」と表示ようになり、市内の文字塔五十二基のうち四十基余が現存する。

五、馬頭観音

道端や社寺境内に、「馬頭観音(馬頭観世音)」と彫られた石碑がよく建っている。このような石碑は市内に五十七基あり、最も古いものは浜之郷・鶴嶺八幡宮参道にある寛政七年(一七九五)造立の碑である。

(梅雲寺・馬頭観音像)

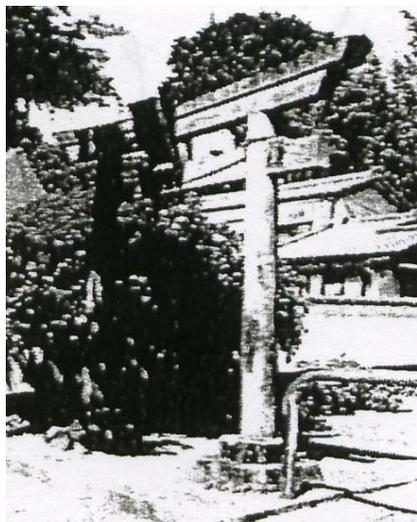


頭上に馬頭を戴く姿から馬の守護神とも考
えられ、近世以降人々は死んだ馬を供養するた
めに馬頭観音像を建てるが多かった。
市内の古い碑としては、中島・浄林寺に「享
和二年(一八〇二)」と「文化七年(一八一〇)」
と銘のある馬頭観音が二基ある。また、下町
屋・梅雲寺には憤怒の表情をした馬頭観音像が
あり、享和三年(一八〇三)の銘がある。

(鶴嶺八幡宮・馬頭観音)



(行谷・金山神社鳥居)



六、鳥居
市内には石造りの鳥居が四十二基ある(撰
社・末社を含む)が、関東大震災による倒壊の
ため、昭和初期以降のものが多い。
江戸時代に造立された鳥居で現存している
ものは、僅か三基である。行谷・金山神社のも
のは文政九年(一八二六)、平太夫新田・八幡
宮のものは弘化二年(一八四五)、南湖・八雲
神社のものは嘉永三年(一八五〇)の造立であ
る。倒壊した鳥居の一部は、保存されたり、門
柱などに利用されている。

(南湖・八雲神社鳥居)



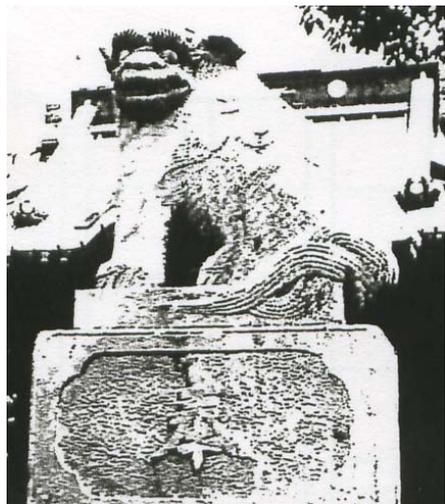
(平太夫新田・八幡宮鳥居)



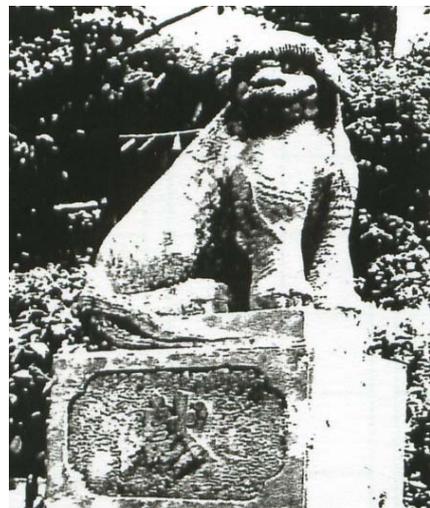
七、狛犬

社寺の入り口の両脇、または本殿正面の左右などに一対で置かれている。一般的に、向かって右側が口を開き、左側が口を閉じているという「阿・吽(あ・うん)」の形態をとるものが多い。

市内では二十七基あるが、そのうち最も古い狛犬は菱沼・八王子神社の元治元年(一八六四)造立のものである。明治期のものはなく、次いで震災後の大正十四年(一九二五)造立の芹沢・腰掛神社の狛犬が、菱沼・八王子神社のものと共に古い貴重な狛犬である。



(菱沼・八王子神社狛犬・右)



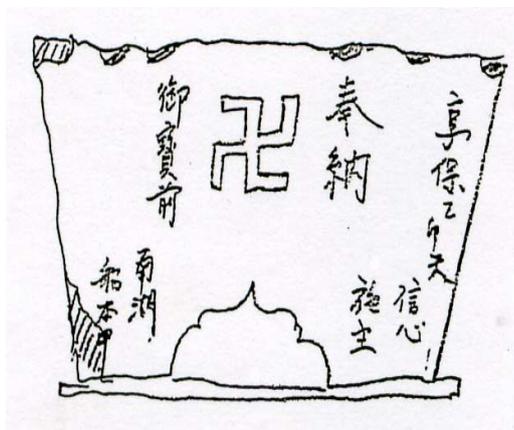
(菱沼・八王子神社狛犬・左)



(芹沢・腰掛神社狛犬)

八、手洗石

手洗石は、他にも水鉢、手洗鉢、水盥などの呼び名がある。



(鶴嶺八幡宮・手洗石)

市内には六十一基あるが、そのうち江戸時代に造立されたものが十八基あり、その後も続けて明治・大正・昭和・平成と造立され、震災の影響が少なかつたため古いものも残っている。最も古いものは、浜之郷・鶴嶺八幡宮にある享保二十年(一七三五)造立のものである。高田・熊野神社にある寛延四年(一七五二)造立のものや、萩園・子ノ権現にある宝暦七年(一七五六)造立のものは、いずれも上部が欠落している。

(子ノ権現・手洗石)

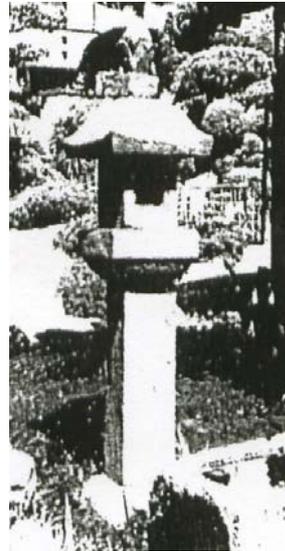


(熊野神社・手洗石)



九、石燈籠

主に、社寺や日本庭園などに置かれているが、ここでは信仰に係わる石燈籠について挙げる。市内には九十八基あり、最も古いものは下寺尾・白峰寺の燈籠で寛文十一年(一七六一)の造立である。



(下寺尾・白峰寺・石燈籠)

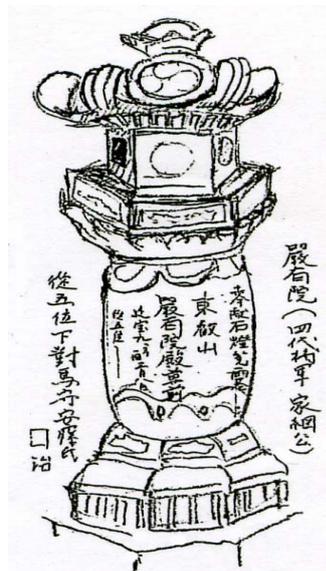
(石燈籠の各部位名称)



関東大震災後に造立されたものが三十体余あり、その多くが現存している。

市外から持ち込まれた石燈籠で最も古いものは、本村・海前寺山門前にある慶安四年(一六五一)造立のものである。これは、東京都港区芝・増上寺境内から移されたものである。また、徳川家の菩提寺として栄えた東京・上野の寛永寺の石燈籠も献上され、市の重要文化財に指定されている。現在、それらは市役所前に三基(延宝九年(一六八一)、天明六年(一七六八)、天明六年(一七六八))、天明六年(一七六八)、小和田公民館一基(天明六年)、小和田・上正寺一基(延宝九年)、個人宅一基(天明六年)と分配、安置されている。

(上正寺境内・石燈籠)



次回は市内の珍しい石造物を紹介します。

〈編集後記〉

「ちがさきの石仏」第九号を、ようやく発刊することができました。石仏調査は、茅ヶ崎の人々の歴史を民俗学の観点から調査し記録・保存していく中で、重要な作業であると考えています。石造物の一つ一つが、庶民の信仰を表象したものであり、地域を知るための小さな手がかりになります。

平成十七年に、当館としての市域の石仏調査を完了いたしました。現在は、フィールドでの調査時に作成した調査カードの内容を確認しながら、「茅ヶ崎の石仏」(仮)という報告書にまとめるための作業を進めています。その作業の中で不明点や再確認が必要なものに関して、順次再調査を行っています。今回の石仏調査ニュースの中に、その再調査の結果分かった興味深いことがいくつか掲載されています。

石仏調査は、遺跡調査などによる考古学的な歴史調査とは異なり、庶民の信仰やくらし、心性を、現存する石造物に民俗学的にアプローチすることで明らかにしようするものです。発掘調査とは違い、調査自体の規模や発見時の反響の大きさと比較してしまうと、地味な印象を受けますが、石造物に息づく造立者たちの思いを、調査の中で感じるとうることができます。

石仏は、その特質である造立の背景をなしていた庶民信仰が、系統的な宗教信仰の枠から外れているため、宗教史の研究対象からはずされてしまうことが多いものです。また古代や中世の宗教石造物に対して下される美術的評価の基準から外れてしまっているため、美術史の研究対象からも外れてしまっています。しかし近世に造立された石仏を調査していくことは、これまで知られていなかった庶民の精神文化を解明する手がかりになると考えています。

現在、地域社会は解体され、生活様式や価値といった人の内面も変化しています。その変化のスピードは、年々加速しているように思いますが、そして段々と確かなものが少ない世の中になってきているとも感じます。そのような激しい変化の中、石仏や石碑などの石造物は素材の関係上、その変化はとて緩やかなものです。過去のくらしの空間性や、それを造立した庶民の気持ちや今に伝える、小さいけれども確かなものの一つが石仏なのではないでしょうか。

(文化資料館 須藤 格)

〈お知らせ〉

茅ヶ崎市文化資料館では、市教育委員会で収蔵している民俗資料を、市民のボランティアの皆様と協力して調査、整理、保存、展示などを行っています。資料の整理は毎週木曜日に、また石仏に関するフィールドワークなどを毎月第3金曜日に実施しています。ご興味のある方は、ぜひ一度ご参加ください。

※ご不明な点等ございましたら、一面に記載してあります、電話もしくはメールに願ひいたします。

石仏調査の様子

